「一生で一瞬」

中国国際交流員（CIR）　何　超さん

一年前の桜の季節に

「さくら　ひらひら　舞い降りて落ちて
　　春のその向こうへと歩き出す
　　君と春に誓いしこの夢を
　　強く胸に抱いて　さくら舞い散る」

大好きな「いきものがかり」さんの曲を聴きながら、車窓越しで外を見ていた。
まるで春を名残惜しむようで、柔らかくて可愛らしいピンクがまだ少し枝先に残っていた季節だった
初めての海外生活、初めての日本。そして、初めての熊本。今まで教科書やドラマの中でしか見たことのない和の国の景色が、まさに目の前に広がっていた。
ともなく落ち着かないのは、期待と不安、半分半分。
「これからの一年間、どんな生活になるんだろう？」と。

初めてばかりの 365 日

初めての一食は、「伝」のラーメン。しょっぱかった。でも店長の微笑みが記憶に残った。それ以来、常連になった。
初出勤日は国際室二番目の早さだった。朝礼のとき、局長をはじめとするシティプロモーションの皆さんが総出で歓迎の挨拶をくださった。皆の名前が基本三・四文字多いので、暗記するのは一苦労。未だにまだその場ではっきりといえない名前もあって、ほんとに申し訳ない気分。しかし、みんなそれぞれ個性豊かで面白い方なので、笑いの絶えない楽しい職場の毎日であった。
「早速ですが、何さんにお願いがあります」
いよいよ待望の初仕事が来た。それは中国お客さんの受け入れ事業だった。
卒業してから日本語がずっと真空保存状態だった私が、思う存分に恥をかいたのは市長表敬の時。緊張しているこというともあったが、生半可の日本語で一生懸命市長の意思を伝達しようと身振り手振りでどたばた。
焦ていた僕に気付いてくれた幸山市長。談話のスピードを落とし、短くてわかりやすい内容に変えてくれた。そして後ろで待機している同僚の皆さんが、拳を握って応援しているのが目に見え、ようやく気持ち落ち着かせ、後半を何とか収めた。初めての仕事、不合格だと自ら判定を下した。
すでに死んでいたつもりの学習意欲が再び燃え上がった。
その後、初阿蘇の驚嘆、初馬刺しの躊躇、初文化サロン・月１サロンの笑い声、初料理教室のどたばた、初学校訪問での中国パーテイー、初「火の国祭り」の踊り、初マラソン……いろんな初経験や出来事が、僕の在熊 365 日間の冒険書を書き添えた。

感謝の気持ち

人間が生きていくためには、三つのものが必要不可欠だと、僕は常に思う。それは未来への「夢」、過去の「思い出」、そしてこれらを繋いでいく今の「絆」。
人生の中でそうそう手に入らないものを、自分はこの一年で全部手に入れた。
日本に来たばかりで心細かった私に、「お帰りなさい」って言ってくれたホームステイの家族。仕事であれプライベートであれ、僕のことを弟のように世話をやいてくれた市役所の先輩たち、一緒に遊びに行ったり馬鹿なことしたりして楽しんでいた CIR の三人、いつも笑顔で優しく接してくれた会館の皆さん、そしていろんな場面で出会った熊本の友人たち。この一年間、様々な形で僕の人生を彩ってくれたすべての皆さんに感謝の言葉しかいえない今。

CIR の仲間達と

桜とともにバイバイ

再び、桜の季節が訪れた。ほんとに「あっ」という間。
最近の職場は、「送別」の雰囲気が漂い始めた気がする。近くの席の同僚たちが前より何倍に優しくなり、「何くん、今日のお昼予定ある？ないなら一緒に食べに行こう」との注文も多くなってきた。時に、一回しか共に仕事した事のない人が突然現れ、別れを告げようとすることも増えた。嬉しさと寂しさ、半分半分。
「一期一会」「袖振り合うも他生の縁」「会うは別れの初め」などなど、最近よく耳にする言葉。日本語って案外、こういう切ない表現が多いなあって感嘆した。
すっかり慣れ親しんだ日本・熊本の生活にあと一ヶ月でバイバイ。長いようで短い一年間。今年、花火大会が復帰するそうだ。残念ながら、僕とはすれ違いになりそうだ。また、山鹿の灯篭祭も見に行きたい。ほんとに、皆さんと一緒にやりたいことや見たい景色はまだいっぱいあるのに。
「日本の女性と結婚して熊本で一生暮らしていきたい」
最初の戯言は、今は本音となる。

「さくら、さくら、いざ舞い上がれ
　　永遠にさんざめく光を浴びて
　　さらば友よ　またこの場所で会おう
　　さくら舞い散る道の上で」

またいつかかならず帰ってくると、心の中に誓った。皆さんとの絆や思い出が消えない限り。その時、いつも通りの笑顔で「久しぶり」って声をかけてください。

日本の子ども達と